

## 今福線研究会の二年目

(株) グランド調査開発

村上 英明

### 1、はじめに

今福線研究分科会の二年目は、地元の方々と連携をとり、初年度に行くことのできなかった旧線の一部に入り現地踏査を行ない、さらに地元の代表者との懇談会を行なって意見を聴いた。また別の日に会員全員の打合せ会を開いて今後の方向を見いだしたことが、今年度の主な活動であった。以下それらについて詳しく報告する。

### 2、予備調査

先遣隊として、嘉藤会長ほか4名が、現地に詳しい佐野町老人会(寿会)の石本恒夫会長に先導をお願いして、昨年は行くことのできなかった旧線の一部を、11月5日に踏査した。

当日は一日中、雨が降る中を全員カッパ、ヘルメットに長グツ、腰には熊鈴という重装備で、ナタやカマを使って藪を刈りはらいながら、人が入らなくなった路線を1kmほど進んだ。

この区間の路線は溪流に沿っており、楽に歩くことのできる道さえ整備すれば、沿道の風景は楽しめそうであった。

ただ入口に当たる橋梁には、スズメバチが巣を作っていたり、長グツがはまり込んで抜けにくいほどにぬかるんでいる場所もあったりなど、一般の人々に歩いてもらうには、少し手をかけて整備しなければならぬこともわかった。



写真 1、予備調査参加者



写真 2、足元にスズメバチの巣

昨年、報告した『おろち泣き』は、地元老人会により『おろち泣き橋』と命名され、現地には新たにコンクリートの立派な標柱が建てられていた。

### 3、本調査

本調査では研究会の全員で11月19日に、先に踏査した区間を歩いた。この日も雨であったが、予備調査の時に雑木や草を刈り取っていたので、いくらか歩きやすかった。

しかし、新たにイノシシ除けのネットが張られているところがあり、『おろち泣き』の聞こえる橋下へ行く入口もネットで塞がれていた。

この後に開催した地元との懇談会で、地元の人は「入口のネットは、針金で簡単に留めてあるだけだから、手で簡単に開けられる。」と言っておられたが、知らないで行った人は、針金をはずしてまでは入りにくいと思われた。

我々は、入口の針金を開けて行ってみると、折からの雨で下の川の水が増え、いっそう明確に『おろち泣き』の音が聴こえていた。



写真 3、藪になった路線敷

### 4、地元との懇談会

11月19日の本調査の間の時間を調整して、現地の公民館において地元の連合自治会長、町内会長、老人会(寿会)会長さんら8名と懇談会を行った。

我々の会員の一人が出雲ソバリエの小村晃一さんにご苦勞をお願いし、美味しい割子そばを食べながらの楽しい懇談会であったが、地元側から、我々にとっては意外な意見が出た。その主なものは次のようであった。



写真 3、地元との懇談会

よそから来る人々に路線を歩いてもらうためには、橋梁の上の手すりなど危険なと

ころがあるので、修理してもらいたい。

町内に現在ある案内看板が傷んでいるので、『おろち泣き』なども新たに描きこんで修理してもらいたい。

『おろち泣き』の話は聞いたが、まだ行ったことはない。(という声もあった)

さらに、については、技術士会でやってもらいたい。できなければ管理者の浜田市に予算要求して実施してもらいたいというのである。

昨年、我々が『おろち泣き』を発見して、地元側に話したところ大変に喜ばれて、すでにその橋梁に『おろち泣き橋』という立派な標柱まで建ててもらっていたので、地元の今福線にかける熱意を感じていたところであったが、意外に無関心で無気力な意見続出に驚いたわけであった。

我々としては、そこまではできない、「そんなお金のかかることばかり考えなくとも、自分たちで木切れやロープなどを使って、手作りのごく簡単な標識や柵を作ってみてはどうですか。」と意見を述べたが、反応はにぶかった。

我々としては今後、案内地図を作成してホームページで公開するつもりであることを話し一応、地元側から賛同の意見を得て、懇談会を終った。

## 5、 考 察

さて冷静に考えてみると、地元には今福線に無関心な多数の人たちがいることも当然であろう。

『おろち泣き』へ行く入口が、イノシシ除けのネットで塞がれていたのも、よその人々が来ることを歓迎しない人がいて張ったのかもしれない。

鳥根県技術士会で分科会活動の目的の一つに『社会貢献を目指す』と掲げることが多いが、社会貢献はそう容易なことではないと思知らされた懇談会であった。我々は無力なのだと諦めることになるのか。

しかし、容易ではないが希望はあることに気づいた。

現地には今福線の存在を広く知らせようとする看板や土木学会から選奨土木遺産の認定を受けたことを知らせる看板が、地元自治会の手で建てられている。

そしてこの1年以内にも『おろち泣き橋』の立派な標柱も、地元の手で建てられた。



写真 4、地元自治会が立てた看板(1)



写真 5、地元自治会が建てた看板(2)

これらを実行に移した今福線に熱い想いを抱いている人たちは今も地元におられることは間違いない。

その人たちと連携して、無関心な人々に関心を持ってもらうようにする一方、今福線を広く社会に知ってもらうことは十分に可能であり、今福線研究を始めた我々の取るべき道であろうと考える。

今年度、我々は『おろち泣き橋』も含む今福線案内マップを作成し、島根県技術士会のホームページに載せようとしている。これもささやかながら今後、現地に興味を持つ人々のガイドとして役立ててもらえるであろうし、また我々とは別に今福線に関心を持つ人々が、それを足がかりに、さらに研究や開発を進めてくれることも期待できる。

そして、数百億円は費やされたこの事業に携わった先人たちのご苦勞が社会から完全に忘れ去られないようにするためだけでなく、将来に向かって今後、新たに地元や島根県の観光資源として、あるいは工業や科学技術の実験場などとして利用されるようになることを願って、我々の研究会はこれから3年目の活動に入る。



写真 6、おろち泣き橋の標柱

以上。